

特集：名誉院長 長野彌先生

長ぼんと黄色いおべんとう

昭和25年卒 二橋 美都子

“たされ！”（東北花巻の方言で巖窟の意）
鋭く甲高い声と共に、ひきちぎられたガーネットのネクタイが、ひらひらと乾いた初夏の校庭に舞い落ちていった……。

昭和20年3月10日の大空襲に追われ、故郷をもたないわが家が、やっと伝手を求めて疎開して来た先の岩手県花巻での戦中体験の一コマである。

なにかにつけ疎開者は白い眼でみられ、初等科の頃から、まるで皮膚の一部でもあるかのように馴染んでいた制服も、ネクタイも、校章も、誘りの材料にしかならなかった。

東北の初夏は美しく、一斉に花は開き、郭公がなき、焦土の東京とは較ぶべくもない平和そのものの自然があったが、女学生も田植えにかり出され、あのヌルヌルした蛭に足の血を吸われるに至って、もう私はがんとして登校拒否娘と化してしまった——。

そして8月15日の終戦。

秋が来て二学期になっても、一向に登校する意志のない娘を見兼ねて、母は長ぼんに手紙を書いて綿々と現状を訴えたものである。

東京に帰りたくても家は丸焼け、頼る親戚知人も焼け出されていて、残る手段は青楓寮に入れて頂くほかに道はなかった。

師範科（現在の保育科）の生徒のために以前からあったこの寮に母は目をつけ、母の熱意に負け



た長ぼんから女学生御法度の寮に入寮のお許しをいただいた私は、意気揚々と東北をあとにしたのである。女学生解禁の報に疎開先から行き場のない生徒がどんどん入って来た。しかし、あの食糧難である。

飢えのために殺伐としていた寮生は、食糧ストライキを起こしたり、窓から脱走したりで遂に寮監先生は辞任してしまわれた。

そこで長ぼんは、寮生を何とか統率しなければならぬ羽目に陥り、そして我々は、あの長ぼん校長と寝食を共にすることになったのである。

まるでその時の寮といったらスラムのようなものであった。食事の鐘が鳴るや、ふかしいもやウスマの入ったスイートンに目の色を変えて殺到し、水道事情も悪くて、水洗トイレはろくに流れない

汚物で悪臭を放っていた。

長ぼんはそこで一計を案じ、初等科の校庭の隅に小さな畑を作って、それを肥料にしたものである。あの汚物を、何に入れて運んだかは忘れたが、耕した土の匂いと、重かった肥やしの匂いは忘れられない。

そのうち、私はどんどんやせて顔色が悪くなり、保健所のレントゲンで胸の病わづまいと診断された。(実は単なる栄養失調だった)

あの特別室での灰色の日々……。ある朝、ドンドンとドアを叩いて長ぼんが入って来られ、「昼になったらこれをおあがり」と手にした四角い風呂敷包みをぼんと置いて出て行かれた。—— 何だろう。おべんとう箱であるらしいことはわかったのだが、持ち上げて振ってみたり匂いを嗅いでみたりで、遂に私は昼まで待ち切れなくなって風呂敷包みを開けてしまったのである。アルミのおべんとう箱の蓋を開けると、そこにはなんと端から端まで真っ黄色い炒り卵がかかった真白いごはん！ 私はただ夢中でかき込んだ。(世の中にこんなおいしいものがあったのか。)

そのおべんとうは、寮生と粗末な食事を共にしていた先生のを案じた奥さまが、お嬢さんの羊奈子ちゃんに託された唯一の栄養源であった

のだろう。それなら先生は、お昼に何を召し上がったのだろう。そんなことを当時考える余裕はなかったように思う。

鮮やかな黄色いおべんとうは、数日後私が疎開先へ強制送還されるまで続いたのである。

先生、奥さま、ほんとうにありがとうございました。校長先生と云う、雲の上のような存在の方とこんなに身近に接することが出来たのは、戦後という特殊な時代のためだったけれど、私が、そして寮生皆が先生から得ることの出来た暖かさは本当にかけがえのないものだった。そこから私達は、思いやりや優しさや、協調の大切さや、さまざまなものを体を通して体験できたのである。

苦しかったけれど、淋しかったけれど、またいろいろな経験もできたあの頃——。

教師を、暖かい血の通った一人の人間として感じられれば、現在問題になっている教師と生徒との離反、トラブルなどはなくなることだろう。

卒業式の日、長ぼんはカメラを抱えて現れた。

“写真を撮ってあげよう。君がいなくなると英和が静かになる。”この一言で私はギャフンとして英和を去ったのである。戦後の一時期と、知られざる長野先生の一面である。

戦 争 中 の こ と

昭和21、22年卒 田之上 浜子

私たちは昭和17年4月、東洋英和高等女学校一年生に入学した。戦後の混乱の中で、特に四年修了を認められ、昭和21年に、54名が卒業し、22年に五年修了の70名が卒業した。そして疎開等で遅く帰京した11名は23年に卒業している。入学した時は、一組51名、二組52名、三組50名であったと思う。一学年の中で三年間に

わたって卒業しているのは、おそらく私共の学年のみではなかったろうか。

戦災によって、昭和20年3月10日には、三組、加藤美沙子さん(浅草区象潟町2ノ2)、松野孝子さん(浅草区花川戸284) つづいて5月25日には、三組担任でいらした、鶴来文子先生の3人が御家族もろとも焼死された。其の頃には

級の80%近くの方々が何らかの形で戦争による犠牲者といってもよい状態であった。従って戦後は生活状態が一変して遂に帰校出来なかった方々も少なくなかったのである。

遠足、旅行、卒業アルバム等、思い出として残るものは何もない女学生々活であったが、其の様な中でお互いに助け合い厚い友情を抱いてそれぞれの人生を歩いてきた。最も宗教的な雰囲気欠ける時代に育ったにもかかわらず、戦後同級生の中から、中里昭子さん（聖心侍女修道会、清泉女学院中学、高等学校、校長）、坂本淑子さん（聖心侍女修道会）、真野充子さん（カルメル修道院、在ベルギー）、の3人が修道女になられた。また受洗して教会生活を始められた方々も少なくなかった。

昭和52年5月15日卒業30周年の記念行事をするにあたり「30年のあゆみ」を編集して卒業アルバムの代わりとさせていただいた。一年がかりで一人一人の写真と近況を集めてささやかながらもガーネット色のアルバム文集が出来上がった時にはやはり感激であった。百年史のために戦争中の思い出を数名の方に記していただき細かくとまではいたらなかったがまとめさせていただいた。本文中の大部分は中里昭子さんの記されたものである。中里さんは東京と千葉で二回戦災にあわれながらも、始めから最後まで動員に参加されていた。鶴来先生の御遺体をさがしに長野先生と行動を共にされたりした事は今でも、長野先生の語り草の一つとなっている。

1941年12月8日、突然真珠湾攻撃の情報が告げられ、今までのように遠い彼方で戦争が行われているという意識から、「われわれ」の問題になって来たことを感じとった。私達は、英和の小学部六年生だった。

学校での礼拝も制限され、何か大事なものを見失ったミッションスクールの生活が始まったのは、



昭和25年6月於院長室（左から長野先生、外崎先生、ミス・マシューツ、ミス・ダグラス、ミス・ウェスター）

これより以前のことである。そろそろ制服の布地も簡単には得られなくなり、食糧も乏しく、燃料も手に入らない時代になっていたとき、私達は女学校生活を始めることになっていた。何ごともなく毎日を送り、先生方と、そして友達と語り合い、勉強するのが当たり前と思ひ、また、実際にそうしていたのも2年間、1944年三年生となつてから授業らしい事をしたのは一学期のみで、四年生は凸版印刷に動員され、五年生と三年生は学校内で沖電気芝浦工場の仕事に従事した。仕事の内容は、通信機のケーブルの線の先を、ハンダづけし易い様にむく仕事であった。学校工場で作業したのも束の間、私達三年生は、後半から「沖電気」の芝浦工場に動員され、当時国防色といつていたカーキ色の作業服姿で五階の組立工場の工具として働いたのであった。無線機関係の仕事で女子にも出来るもの、それはハンダ付けと、ケーブルの先を糸で始末することに尽きていたが、少しでも戦争に勝つためにと、多くの者は、純粋な気持ちで仕事に従事していた。学校からは倉長先生（上田）と丸山先生が来て下さっていた。工場側と生徒との間に入って実に気苦労の多い毎日でしたらしたと思う。しかし戦局は段々ひどくなり、仕事の材料もとどこおりがちとなつてきた。仕事が



東洋永和作業所の表札のある正面玄関

ないからといって本等を呼んでいると叱られてしまった。

1945年5月25日の未明、またもや東京大空襲、工場も焼け、自分の家も焼けた。お近くの吉本先生のお宅も全焼した。長時間に亘る連続的な爆撃は、心理的にも物質的にも大いなる害をもたらした。私は焼跡の一時的な始末を済ませ、まず、気にかかっている学校へ自転車をとばした。焼跡を縫うようにして、当時の三河台町の角まで行った時、校舎の一部が見えた。まずはよかったと思ってそのまま学校に行くと、二、三の友達と、国民服にゲートル姿で学校を守っていたら、霧気のような雰囲気の中、長野先生にお目にかかった。先生は、心から英和を思い、先生方や生徒に心を配っていて下さった。空襲による被害のニュースを伺ったが、その中でも私たちに直接関係のあることは、鶴来先生が行方不明の状態、手がかりがないという事実であった。長野先生は、これから神宮参道に近い先生の御宅の付近まで探しに行かれると、堅い決心の程を私たちにも披瀝されたので、理屈を云ってはいられないという気持ちで、すぐ先生の自転車を追うようにして焼跡を走り、必死の思いで青山六丁目の辺りまで行った。見渡す限り、道路の右も左も何もなく、文字通り焼野原と化した青山通りは、悲惨そのものであった。人間も犬も折り重なって黒こげの状態に倒れ、窒息し

た人達はろう人形のような姿で倒れ、軍隊の手で葬られる順番を待つような形だった。

長野先生は、私には行かれないような一段低くなっている場所まで降りていかれ、丹念に鶴来先生を探しておられた。危険をものともせず、ひたすら一人一人に向けられる誠実な兄弟愛が先生のそのお姿を通して、いかに人間の生命が大事であり、存在価値を認めることが大切であることを知らされたと思う。火の渦にまきこまれて無惨な死を遂げた多くの人達の中に、鶴来先生がいらっしゃることは考えたくなかった。しかし、結果的には見付からないままになってしまった。またいつ空襲があるかわからないという気持ちでその日は家に帰った。

このような体験をどのように評価すべきなのか、考える暇もなく、私達は陸軍の仕事をするようになった。それは、戦争も末期に近づいたことを物語るような作業内容だった。出征し、故国を離れて第一線で戦死された多くの兵士達の名簿の確認と遺品合わせだった。ある時には、芝の増上寺に行き、境内の防空壕の中にぎっしり詰まっている遺品の箱の上書きを見て、名簿にチェックする仕事に一日費やしたこともあった。上書きには、サイパン島で戦死とか、ガダルカナル島で、というような記録が名前の横に記されていた。15cm四方ぐらいの小さな箱の中に、何が入っているのだろうと思いつら、終始、軍の命令に従って作業を行ったものである。

格好の悪いもんぺ姿、非常食と防空頭巾という出で立ちは、当時普通であったとは言え、夏になれば重苦しくなるのは当然で、制服への郷愁も増し、警報発令、敵機来襲のたびに、どこにいても近くの壕に入らなければならない煩わしさと恐怖からも、早く逃れたいと思っていた。当時のことを想起してみると、私たちの成長期、所謂十代の頃は、あらゆる点で制約の多い、忍耐を強制され

たような時代だったと言っても過言ではないと思う。

しかし、こうして同時代を生きた人間の中にも、二通りの生き方があった。疎開してひたすら身の安全をはかり、食生活にもそれ程乏しさを経験せず、戦争の波を30%ぐらいしか受けずに生活し続けた人々と、思想的なことはともかく、神風的なというか、特攻隊的な精神で、最後まで動員された状態で、或いは、それぞれの持ち場で頑張った人々との二通りではなかったろうか。

1945年8月、文字を書くのもぞっとするような原子爆弾の悲劇が知らされた。私たち日本人は、それ程の仕打ちを受けなければ、戦争を止めない頑固な民俗なのだろうか。すでに、南方での玉砕が告げられた頃から、戦況は敗北の一途を辿っていることは、私たち女学生の年代の者にも理解できたのに、何故ここまで追いつめられなければならないのだろうか、サイレンが鳴るたびに、恐怖心をかき立てられ、心理的な圧迫に何とかして耐えていかねばならないと思いつけて疲れ切った頃、15日の終戦を迎えた。歴史的なこの日、体中の力がすべて抜けてしまったような気分で過ごしたのを憶えているが、その反面、恐怖からの解放と、学校に帰れる喜び、食糧も少しずつ手に入ることにに対する安心感等、希望の光がさして来たのであった。

その年の9月、もう堂々と制服を着てもよい平和な時期に一步踏み入れたことは確かであるが、ここにも二つの立場、二つの歩み方があった。もともと、罹災者である私たちは、急に勉強が始まってノートから鉛筆に至るまで、当然その辺にありそうなものが焼失しているので、揃えるために苦労したわけだが、焼けなかった家、或いはその家に疎開先から戻って来た人々の生活は全く前者とは異なった生き方であった。

日本は、窮乏の中から新しいものを見付けはじ

めて焼跡から草の新芽が頭をのぞかせる頃になると、驚く程早く街も姿を変え、人々の外面も変わっていった。しかし私たちの母校、東洋英和は、その内面に潜む本来のもの、一番大事なものを私達に示し、時代の波によって動かされない、確固たるキリスト教の信念によって生きる意味と目的を私達に見つめさせる機会を与えて下さった。物質が無くなったとき、ともすると形にとらわれてがっかりするのが人間としては自然な反応かもしれないが、ミッションスクールでは、決してその反応にとどまることなく、精神的なものの重要性を教えられた。とにかく過渡期に学校生活をする運命にあった私たちは、変革のモラルに対しては厳しい見方をしていた。戦争中大事にされていた主義主張がいかの間違っていたかを云々するのではなく、次に来る変革に対するモラルが、本当によく説明されているか否かに神経をとがらしていたのである。戦時中に青春時代を過ごした私たちは、いつも本物を見出そうと努力し、問題意識をもち乍ら生きて来たので、これからも平和な社会が築かれるために、縁の下の力もちとして貢献できれば幸いである。

昭 和	大 正	明 治								長野彌先生略歴	
7 年	15 年	37 年	58 年	51 年	49 年	47 年	21 年	20 年	12 年		8 年
6 月	11 月	2 月	2 月	7 月	6 月	3 月	9 月	6 月	2 月		4 月
31 日	7 日	17 日	17 日	20 日	3 日	31 日	1 日	27 日	1 日		1 日
御 召 天	東 洋 英 和 女 学 院 名 誉 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 理 事 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長		東 洋 英 和 女 学 院 長
鹿 児 島 教 会 で 受 洗	東 京 帝 国 大 学 理 学 部 卒 業	御 誕 生	東 洋 英 和 女 学 院 名 誉 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 理 事 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長	東 洋 英 和 女 学 院 長		東 洋 英 和 女 学 院 長
就 職	就 職	就 職	就 職	就 職	就 職	就 職	就 職	就 職	就 職		就 職
教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭		教 頭
教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭	教 頭		教 頭

長 野 先 生

元理科教諭 沓 沢 謙一郎

私が東洋英和につとめることが出来たのは、私が大学生のとき卒業研究の面倒をみて下さいました大学の脇本教授と長野先生がお知り合いで、又長野先生の奥様と脇本教授の奥様どうしが女学校の同窓という関係から、私は脇本教授に紹介されて英和に入ることができました。

長野先生は長い間物理と数学を教えていらしたので、いわば私と同様のことをかつてやっていた関係もあり、私は特に理解して頂けたと思います。定年になってから時々思うことはやはり私は英和につとめて幸福であったこと、35年間の英和生活の中で約3分の2を長野先生のもとで勤められたことは、本当にラッキーであったと思います。管理能力やリーダーシップの欠如を自分に感じていた私は、担任をするかわり学校の電気関係のすべての保守を申しでました。我まな申し出でしたが、情け深い長野先生や井上先生は聞いていただきました。あの時、無理に担任をやっていたら、生徒達に大変迷惑をかけたかもしれないと思うのです。「伯樂馬を見る」という言葉があります。中国の伯樂という人が名馬をみぬく名人であったということです。私は名馬などと思っていません。（とんでもないことです。）がそれなりに適所適材ということで評価していただけたという感謝の気持もあり、長野先生に対して私なりの忠節を誓いました。私の結婚式に長野先生が出席していただきました。先生はそのときのスピーチの冒頭で「私は沓沢先生とともに働かせていただいている者です」と話しました。このことは私の親戚一同に大変な感銘を与えました。私の叔父は「お前は大変幸福なやつだ。あんなに謙虚な立派な人のもとで働けるなんて」といい他の人も異口同音に賛成しました。終戦後しばらくの間、日本全体は貧乏でした。東洋英和の給料も決して高いものではなかったのですが、私は良い学校良い

職場に恵まれたという一種のプライドのようなものがありました。そのころクリスマスの先生方のパーティは大体スキヤキと決まっていた大変楽しいものでした。その頃スキヤキなどは肉が高価でなかなか食べられなかったので、先生方に満足してもらえようと長野先生が考えられたものと思います。長野先生は英和を家族的雰囲気にして、私などもその雰囲気に浸りながら、今から考えると少し甘えながら過ごしたと思います。私は実験が好きで、教育に役に立つものや、立たないものまで、やたらに実験をして学校の予算を使い過ぎたらしく、長野先生に学校もそんなに楽ではないのもっと儉約するよにと注意を受けました。その後しばらくして、「沓沢先生、この間、私学の校長の会があり、多田先生（東海電波高校の校長）に会ったとき、沓沢先生みたいな多少マニア的先生は大事にした方がいいよと云われたよ、だから予算も多少は使っていいよ。」これを聞いた私は感激してかえって学校の予算を使いにくくなってしまいました。

その後長野先生は院長を退き、石井先生光明先生と続くのですが、光明先生るとき、長野先生とは全く違う合理的な体制が実施され長野先生の家族的雰囲気に慣れていた私はカルチャーショックを感じて、学校への忠誠心のようなものは薄くなり、反撥さえ感じたのですが今思うと大変後悔しています。なぜ素直に従うことができなかったのか。光明先生は光明先生で大変大きな仕事をなさったと思います。長野先生が亡くなられた時、お通夜に行き先生のお顔を拝見した時、急に涙がでて止まらなくなりました。どうしてこのような悲痛な感情におそわれたのでしょうか。私は私の最大の理解者の一人であった長野先生を失ってしまったのでした。

長野先生の思い出

— 富岡正男先生からのお手紙 —

長野彌先生のことで、思い出したので書きます。あまり久しいので年月日など調べないと文にならないのですが、心に残っていることだけ、書きます。

麻布学園の相模湖事件の時、長野先生について行って、麻布学園の様子を見たこと、私と別れたあと、長野先生が何をされたか、について、です。

相模湖に遠足に行ったのは麻布学園の中学生でした。中2に長野一字（かずいえ）君（長野先生の長男）が参加していました。相模湖に小さなといっても8人や10人は乗れる位なボートがあった。それに、18人位乗って、ボートが動き出したら、定員の倍もの重さに絶えきれず、舟が沈んで、1人か2人位助かったのか、全員か？湖底に沈んだまま、浮かんでこない。ラジオも新聞も3日間位、情報を大見出しで報道しました。（昭和30年5月頃）？（注）

野尻学荘には額田^の年^ろ（ぬかっぼん）副荘長がいて、湖畔のこと故、水上のことにはきびしく、水泳、ボート、ヨット、等注意事項は、誰でも当然知っているように教育が行き届いていました。相模湖事件をきくと、英和でも「これは大変」と教員室は驚きました。長野一字君（中2）は、事件現場から離れた所で自宅に電話を入れ、「小さな舟に定員の倍も乗ったので、目の前で舟が沈んだ、勿論、自分は乗らなかった」とお母様に知らせたそうです。

その日の午後、授業がない私が事務室にいと、長野先生が、「富さん、自動車にのせるから、僕について来なさい」と言う。その日は雨あがりだった。私は支度をして、英和の玄関から、立派な外車（銀座、はなつばきの社長が長野先生の同級生）に同乗して麻布学園へ行った。何か連絡事項があったら、富岡に知らせに走らせる積もりなの

だなどと自分だけに承知して、長野先生にぴったりついて、離れなかった。その時に私は知った。私立学校（中・高）校長会というのがあって、長野先生の他に5、6人の校長先生が麻布学園に来ておられた。その中に中野の宝泉学園の校長先生がおられ、長野先生とテキパキと打合せをしておられた。長野先生は麻布学園の細川校長の校長室に行き、短いあいさつをされた。その部屋で私は、報道陣の無礼というか、暴力を見た。自分の学校の生徒、職員が、遠足先で事故を起こした。校長としては、電話でも人づてでも、何とか、情報を知り命令を発したんだろうに、4、5人の記者が細川校長の口先にマイクをつきつけて、質問したり、校長室に電話がかかると何の情報だと部屋を離れない。長野先生は、私を廊下へ呼んで「学校の外の電話がつかえるかどうか見てこい」と言った。私はすぐにとび出したが、三つ位あった公衆電話も、赤電話も各社の報道陣が占拠しているので、使用できるものはなかった。戻って長野先生に報告した。「よし判った」というと私を待たせて、長野先生は表へ出られた。戻ったので「どうしましたか？」と聞くと、近くに英和の卒業生の家があるので、そのお宅の電話を借りたとのことだった。校長会の先生方と別室で打合せをしておられたが、やがて出てくると「富さん帰ろう」とまたせてあったハナツバキの外車で英和に戻った。「ごくろうだったね、ゆっくり休みたまえ」私は帰宅した。その日は金曜日だったかも知れない。

数日が過ぎた。私は渋谷の東横デパートを見上げていた。相模湖の深いところは、あのデパートの屋上から、忠犬ハチ公までの距離があると聞かされたので、「沈んだ生徒の遺体が全員発見されるのには、時間がかかるなあ」と思った。渋谷駅のどこかで、報道写真を見た。相模湖の事件現場

の近くで、ズボンをたくしあげ、ワイシャツ姿の5、6人の男性が水に足を入れて何かしている所が写っている。瞬間私は思った「あっ、長野先生！」よく見れば体つきが長野先生そっくりだった。あの当日、私を帰宅させたあとか、次の日かわからない、長野先生は相模湖の事件現場へ行かれたことを私は知った。（元音楽科教諭）

（注）

相模湖事件について、（朝日新聞縮刷版より）昭和29年10月8日（金）午後一時10分頃、神奈川県津久井郡与瀬町の相模湖で、修学旅行に来ていた東京麻布中学の男子二年生一行 270人のうち78人が昼食後の自由行動の時間に同湖沿いの内郷村観光協会所属の観光船内郷丸（5トン）＝定員35人、大房岩夫船長（19）＝に乗っていたところ船が横に傾き浸水、乗員全員が湖中に投げ出され、岸でこれを見た遊船組員役50人がボートで救助に向い、うち65人は助けられたが、13人は行方不明となった。

あとがき

長野先生が召天されてから10年、長野先生の学外のお働きを記録したいとお願ひしましたが、原稿が集まらず、「百年史のための記録」の中から、先生について書かれた卒業生のお二方の原稿を掲載させていただきました。長野先生の一面を彷彿とさせる富岡先生のお手紙と、沓澤先生より先生のお人柄の窺える原稿をいただき感謝です。

長野先生は聖書の「右手のしたことを左手に知らずな」の教えを守り、史料室委員会でお話を伺いたいとお願ひしても、「私は何も特別なことはしておりません。職責上はたすべきことをしただけです」と云われて決して何も云われませんでした。「自慢話はしたくない」と言われた先生に、戦時中、戦後の混乱期のこと、学院の発展に尽くされた頃のお話を伺えなかったのが残念です。

（中・高部斎藤浩二・鳥居美子・朽木久子）

100年史のための長野先生のお話

1982年7月15日於 100周年準備室

ミス・ハミルトンに叱られた思い出

化学の実験でバランスを使って幾つかの重りの組み替えを教えながら、亜鉛華の目方を計らせた時です。只計るだけでは面白くないのでお化粧を作りました。丁度その時ミス・ハミルトンが教室に入ってこられて、今だったらその教員は辞めるだろうと思われる程叱られました。

もう一つは水銀の実験の時です。教材の用意をする暇がない程忙しい時で準備を忘れてしまったので、仕方なく財布から銅貨を出してメッキしました。生徒は喜んだのですが、それを間違えて献金に出してしまったのです。鳥居坂教会で大問題となり、一体誰が入れたのか、元凶は長野だということが分かって、この時もミス・ハミルトンにこっぴどく叱られました。ミス・ハミルトンは几帳面でどちらかというと無愛想でしたが、経営者としては秀れた人でした。

赤痢事件のこと

昭和十四年のこと。食堂の調理係で牛乳屋に泊っていた女の子が、保菌者だったのに胡瓜糊みを作ったわけです。

光明さん（院長）をはじめとして大勢罹りました。私（長野）がやっと教頭になったばかりの時でした。食堂を直ちに閉鎖して全教員にその日の生徒の出欠を調べさせ、欠席の生徒の宅を廻らせて赤痢の手当てを指示し、梅酢を飲むように言わせました。その時、今中等部の図書室にいる潮さんも赤痢に罹り昭和病院に入りました。潮さんのお父さんは当時枢密院顧問官でしたから、三箇月間宮中に出仕をご遠慮なさいました。警視庁や朝日新聞からは随分叩かれましたが、それにも拘らず、あの時の処置はよかったと仰言って頂ました。